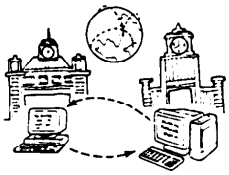
巻頭言



学　会　の　品　位

益　田　隆　司†

最近気がかりなことがある．それは，いくつもの新しい学会が設立され，それらの学会で取り扱っている分野が元来，情報処理学会にとっても将来の最も魅力ある分野ばかりであるということである．それら新しい学会で活躍している人達は，僅か前までは，情報処理学会の重要な研究会を中心になって支えていた第一線の学者，研究者である．学問分野の発展，研究者仲間の関係から自然発生的に生まれたものもあろうが，情報処理学会という大学会の運営に満足できないがために生まれたという要因も大きいように思われる．

創立 30 周年を経て，学会の規模は大きくなったが，近い将来，足元をみると重要な分野が空洞化してしまっていたということにもなりかねない．現在でも，新しい学会が取り扱っている分野に対応する情報処理学会の研究会はそのまま残っているため，その活動は弱体化する可能性がある．さらに，このように分野が重複したまま学会ができてしまうと，いろいろな問題が発生する．なかでも気がかりなのは，優秀な若い人には，いくつもの学会から声がかかり，その人の研究者としての発展を大変に妨げる可能性があることである．可能性のある研究の青田刈りのような現象もままみられる．このようなことを考えたとき，現在のような形で，学会が設立されていくことは決して好ましいことではない．

わが国の情報処理分野全体を考えて，どのような学会のあり方がよいかを考えることが必要な時期にきている．新しい学会ができはじめて日が浅いが，むしろ，今だからこそ，独立した学会との話し合いも可能であろう．会員の方からもぜひ，ご意見をいただきたい．

新しい形態はいくつも考えられるだろう．拡張性に富んだ自由度の高い形にしておくのがよい．たとえば，学会連合のような形態が考えられる．関連するいくつかの研究会の活動が活発になって学会として独立したいといった動きがでてきたときには，情報処理学会のかさのもとでそれを奨励すればよい．活力に満ちた新しい学会ができる．このような専門分野を取り扱う学会がいくつかできてくると，現在の情報処理学会は学会連合のようなものに形をかえるはずである．現在の情報処理学会の会員は情報処理学会連合の会員になる．独立した学会の会員は自動的に学会連合の会員にする．学会連合の学会誌では，現在と同じように，情報処理の全分野を扱う．事務サービスは，できるだけ学会連合で集中して行う．すでに独立している学会も可能ならば，情報処理学会の関連する研究会を統合して専門学会として，学会連合のなかに加わってもらえばよい．

このような新しい学会運営へ向けて，情報処理学会は何をなすべきか．そのための環境作りをすることである．現在の学会の運営は，これまでの拡大の経緯も関係してか，会員数の多い「組織」が学会の運営，諸々の活動に組織として深く関わっているように思われる．これまでの情報処理学会の発展は，そのおかげを大きく受けてきたことは疑いないが，新しい学会が情報処理学会から離れて独立した1つの要因は，この組織中心の運営が好まれなかったからであるということを耳にすることが多い．組織中心の学会運営は，最高の意思決定機関である理事会の構成員を決定する理事選挙の際に典型的にあらわれている．

学会活動は元来個人的なものであるべきである．今後，学会運営を組織によって支えられたものから，個人がより自由に活動できるものにかえていく必要があるのではなかろうか．そうするためには，学会員個人個人の意識改革が必要である，と同時に，組織にも理解してもらわなければならないところが大きい．情報処理学会を国際的に質の高い学会とするためには，たとえ一時的に体質が弱くなってもこのステップが必要である．

（平成3年1月21日）

† 本会理事　東京大学